

昔から言われてきた諺に“兄弟は他人の始まり”というのがある。何だか俗で、冷えびえとしたひびきがあるが、私達療養所に生涯を過ごすことを余儀なくされている者には、何故か実感として迫る諺でもある。近年は一人つ子が増えたりして世相が変わり、豊かにもなっているので、こんな言い方は通用しないかも知れないが、兄弟とは同じ両親から生まれ、文字通り一つのもので分けて食い合うなど、喜怒哀楽を共にしたもとは家族なのである。

ところが成人してみると、同じ兄弟と言っても才能や力量に差が出る上に、運命に左右されることもあって、自から住む世界も違ってくる。それで旨く社会に適応し、功成り名遂げるということにでもなれば、共通の誇りとして話題にもし頻繁に接する反面、悪に手を染めたり、人の嫌う病気などすると、邪魔物扱いされないまでも、近寄ってくれなくなる。中には不遇な者には陰に陽に氣くばりする情の深い人もいるにはいるが、これが世の常のようである。また別々の家庭を持つと、それにかまけることもあって、たとえ悪意はなくとも、施設に入っている病気の者など、長い年月のうちに疎遠となり、忘れられたようなかたちにもなる。

少し話の次元が違うかも知れないが、源頼朝のように昔の武將は、権力を維持するためには血を分けた弟でも容赦なく攻め滅ぼしたし、最近では遺産相続問題で兄弟が熾烈な争いをしている話なども聞く。兄弟とは親子に次ぐ身近な存在であり、何かあると身を挺して扶け合うのが本来の姿なのに、例外的なこととは言え、こんな話を聞くと肉親って何ぞやと思うことさえある。

私達療養所に入所している者にとつて、兄弟を始めとする肉親と疎遠になっている最大の要因は、何と云っても結婚問題などあらゆる面で今なお障害となっているハンセン病の偏見であろう。

幸い私には弟三人妹三人が元氣でいる。家庭の事情で両親の結婚が早かったこともあって兄弟が多く、幼児のとき三人が亡くなり、流産もあったが、一人前として通用しない私は別として、弟妹達六人は貧しい中にも無事成長した。そして社会の底辺にはあるが、みな真面目に働いただけが取り得で、きびしい生存競争に押し潰されることもなく、何とか頑張っており、今後このペースは守ってくれると思うので心配は要らないようである。その上に甥や姪達も十人程いて、あと一息でみな成人する。

ふだんは日々の生活に追われて電話をくれることも滅多にないが、万一私が重い病気でもし、是非会いたいということにでもなれば何をおいても駆けつけてくれる筈である。現に今年早々香川医大付属病院に入院させていただき、足の手術を受けたとき、揃ってはるばる訪ねてくれたし、心配して絶えず電話できいてくれた。これまでは会って話がしたいと思えばこちらから出掛けていたので、「面会に行こうか」と言ってくれても断っていたが、次第に齢をとることもあるし、今後は遠慮しないようにしたいと思う。また弟や妹達も両親の早死もあって逆境の中に育ってきているので、人の心や痛みが分かるだろうし、“総領の甚六”の私よりは少しはしっかりした考えを持っていると思うので、冒頭で触れた諺も私達兄弟には当てはまらないと確信している。

私は昭和十二年十歳のとき発病し、新薬の出現によってハンセン病が治癒する時代になっていることも知らないまま、三十七年当園に入園までの二十数年間、手や足の指などかなり欠損するまで家庭の方で隠遁生活をしていた。そのことで早く亡くなった両親はもとより、弟妹達や身内、また周囲の方々に不快な思いをさせると共に、はかり知れない迷惑をかけてきた。この責を償うことは今更できるわけもないが、これからも健康に気をつけて元気に小旅行を楽しむなり、私の趣味である自己満足のような短歌でも作って、明るくマイペースに生き抜くことが、せめてもの罪滅ぼしになるような気もする。

青松園に入園してからでも既に三十年が過ぎ、私も六十代の半ばを越え、何かと過ぎし日を振り返ることが多い。予測できない不幸に見舞われたとは言え、私という人間が存在したことによって、弟妹達を始め身内、周囲の人々に対してとり返しのつかない罪な日々を送ってきた。この事実は何とも心苦しく、はらいのけることのできない重しとなっているが、軽くすることもできないまま生涯背負うことになりそうである。

私達関係者が繰り返し訴えつつづけていることであるが、ハンセン病も医学的に解明され、既に問題がなくなっていて、終焉の日も見えてきているということ、社会の隅々の人達にまで一日も早く早く認識していただきたいのである。そして、時代錯誤も甚だしい偏見、差別が消え去り、秘密にしてひっそり生きる必要などなく、身内の者共々大手を振って歩ける日の来ることを願って止まない。それも私達が生存中に実現することを望むものである。